

## 戦後学園体制の基盤形成

― 教職員組合運動を中心に ―

日時 二〇〇〇年九月一九日（火） 午前一〇時～午後一時

場所 立命館大学 衣笠キャンパス 中川会館 四階 四〇三会議室

出席者 川本八郎（理事長）

井川定雄（元総務・財務担当常務理事）

中川祐夫（元教職員組合専従書記、龍谷大学名誉教授、弁護士）

山岸永一（元教職員組合専従書記、京都橘女子学園理事・法人事務局長）

松岡正美（百年史編纂室長、特別任用教授）

山下健次（百年編纂室主幹、特別任用教授）

伊藤 昇（総務部次長・百年史編纂室担当）

橋本弘之（百年史編纂室課長）

西川 賢（百年史編纂室契約職員専門職）

司会 松岡正美

## はじめに

伊藤 本日はお忙しいところをお集まりいただきまして、誠に有難うございます。

本日は標題にございますように、『立命館百年史』通史第二卷第一章第三節「戦後学園体制の基盤形成」のうち「教職員組合運動、学生運動の高揚」というテーマで、戦後の一九四七年から五五年頃のことを中心にいろいろ掘り下げて議論していただき『立命館百年史』第二卷の執筆の参考にしたいと思えます。

司会進行は松岡正美百年史編纂室長にお願いしたいと存じます。どうぞよろしくお願い致します。

松岡 先に資料の説明をしていただきましょうか。

伊藤 お手元に資料を配布させていただいておりますので、それをご覧ください。一つは『立命館教職員組合四〇年の歩み』から一九五五年頃までの抜粋、それからそれに載っております年表をこちらで編集し直したものが入っております。もう一つは『民主教育―戦後京都の教育運動史』（一九七六年 国民教育研究所・京都教育センター）の「戦後京都教育運動史年表」、それが二つ目でございます。三つ目は、歴代の教職員組合執行部、青年婦人部長の方々の氏名一覧表。そして四つ目に『立命館創立五十年史』からの関係記述の抜粋でございます。五つ目の資料、これは昨日、私も百年史編纂室で検討した際、他大学、特に明治大学、法政大学、同志社大学の初期の組合がどうであったのかという問題指摘がありましたので、各大学の年史か

ら関係部分をコピーしています。なお、一昨年、校友の大西公哉さんなどにご出席いただいて一九五〇年前後の学生運動についてお話いただいた座談会の記録がありますので、これもご参考までに配布させていただきますました。

**松岡** 最初に本日の出席メンバーの就職年などをなぞっていきたいと思います。川本理事長は卒業・就職が一九五八年ですね。井川さんは一九五四年でよろしいでしょうか。試験採用の第一号でいらっしゃいますね。中川さんが一九五三年の卒業と同時に組合書記局に入られたのですか？

**中川** いや、在学中で一九五一年の三回生の時に書記になりました。

**松岡** 山岸さんが教職員組合の専従書記になったのは一九五七年からですか？

**山岸** 五七年卒業ですけれども、組合専従は五八年からです。

**松岡** 中川さんと入れ替わりということですね。

**山岸** そうです。

**川本** 僕は就職した時、中川さんを知らなかったのは、すでに山岸さんと入れ替わったあとだったわけですね。

**松岡** 皆さんだいたい五五年の前後ですね。私が五五年四月一六日からで、山下さんは五六年ですか？

**山下** 五六年に特研生、五八年に助手になりました。

**松岡** 伊藤次長は何年の就職ですか？

**伊藤** 一九六八年です。

松岡 橋本課長は一九六六年ですね。西川君は何年ですか？

西川 一九五七年です。

松岡 ここにいらっしやる方々は、だいたいそういうようなことで、中川さん、井川さん以外は話題の心のひとつである「緑の学園」構想のあつた五五年以降に立命館に就職されたということです。私の場合は、立命館に入ったとたんに目の前で、その構想がつぶれたり、「安井問題」などがありました。

本日は出席しておられませんが、百年史編纂委員会顧問の岩井忠熊先生はもうおられましたし、執筆者の永原誠先生は一九五四年で、私より一年早い。同じく執筆者で元常務理事の吉田幸彦氏は一九五六年の卒業だと思えます。

川本 百年史編纂室の西岡成幸君は僕と一緒に立命館の就職試験を受けて一次合格した。土肥君がよそにいった。

松岡 そうでしたか。

伊藤 土肥さんというのは、有斐閣に勤務されていて早世された土肥武さんのことですね。

### 教職員組合発足当初を支えた人びと

松岡 『立命館百年史』第二巻の第一章第三節「教職員組合運動、学生運動の高揚」の項は、中川さんと山岸さんを中心に、永原誠さんにも入っていたいただいて、三人くらいでまとめていただこうと思っています。

戦後立命館の復興と民主化のなかで、一番大事なところで、吉田幸彦氏にも材料を出していただきながら、執筆していただければと思っておりますのでよろしくお願いします。

さて、本日配布された最初の資料で、一九四五年からの年表が出ております。組合は四七年に石川伊八さん中心の懇親会みたいところから始まりますが、その後、奈良本辰也委員長時代の三年つづきます。年表には大島亮準さんの名前が、もう書記長として載っていますね。

**山下** 『立命館教職員組合四〇年のあゆみ』を前に読んで感じていたことですが、最初のところに「教職員による自主的な民主化運動に始まり」、「教職員会」ができて、その後「教職員組合連合」が結成されていくとあります。この辺が大切ですが、その時に「中心は戦前の労働組合運動の経験者を含む先進的な教職員だった」と積極的な面が書かれています。けれども、次のページにゆくと、「要求案は執行部がうけおい作成し、一般組合員にははからなかった」となっている。僕らがよく聞くのは、組合大会には弁当と酒が出たということ。最初に組合をつくった時の先進的な教職員というのは具体的にどなただったのでしょうか。組合はある意味では先進的だったけれども、要するに大衆に依拠した民主主義というような話じゃなかったのではないか。この二つの記述のつながりは、そういうことを意味しているのではないかと思えます。先進的な教職員の運動によって民主化が始まったのだが、ベースアップが妥結した時の大会は弁当と酒が出るというような状況であったということでしょう。

**松岡** 組合の飲み食い大会は、一九五〇年に青年部が発足した頃からなくなっていったって、本格的な「闘争」の時期がはじまったといえるのではないか。

山下 奈良本委員長の時代は、その青年部発足以前です。

中川 平盛という人がいましたね。

松岡 平盛さんは一九五二年に名前が出ていますね。

川本 一時、委員長をされていたのですか。

山下 いや、一九四九年書記長、五二・五三年副委員長です。

川本 僕が就職した時、平盛さんからよく組合の話聞かされました。彼は機械工学科の実習工場の人で、中野産治さんが若い頃の上司ですから、尾本寿比古君の大先輩ということになる。小柄な人で、労働組合とはこういうものだと言っておられた記憶があります。

松岡 歴代の組合役員名簿があるので参照してください。一九四八年から奈良本委員長となり、石川書記長、その前は「教職員会」で石川委員長となっている。

川本 井川さん、その時分はまだ百万辺寮はできていなかったのですか。百万辺寮にいた川本脩六郎氏は役員名簿に出ていないね。彼は末川さんと一緒に何か労働組合と経営者関係のこと（地労委）をやっている。その筋では偉かったらしい。

松岡 私らもその話をちらっと聞いたことがあるが、何人くらいでやっていたのかね。

川本 五、六人じゃないか。僕らが入った時は、川本氏は五〇歳ぐらいじゃないですか。定年は六〇歳だから、一〇年ほどは在職していたのではないかと思えます。

松岡 武藤守一さんなんか一緒だったのですかね。

川本 川本脩六郎は戦前の活動家らしいが、どういう関係で誰がうちに連れてきたのかね。

中川 それは聞かなかったですね。

松岡 戦前の活動家といえば、京都では武藤さんがそうですね。

川本 当時の理事長と関係があったのではないですか。

松岡 小田美奇穂理事長ですね。

川本 そう考えられるね。

松岡 小田さんは昭和初期から農民運動なんかにかかわっていた人ですからね。

川本 あの人は偉そうにせず、非常に謙虚で高潔な人だった。

松岡 石川伊八さんというのはどういう人だったのかな。

中川 石川氏は、とかく世話好きで人心収攬に長け、むしろ寝技の人だった。

川本 市会議員に出て、立命館の校友会の幹事などもやっていたでしょう。

松岡 彼は左京区の市会議員だったのかな。

川本 立命館の評議員もやっていたでしょう。

中川 そう、評議員もやっていた。

松岡 彼は戦前からの職員のボスの存在だったのですか。

中川 職員のなかではボスの存在で、中川会館の一階にあった教務課の課長だったと思う。

松岡 石川さんの組織したのは一九四六年からの「教職員会」であり、組合の前史となっているのですね。

「教職員会」は四七年までで、石川さんのちに市会議員となった。その後一九四八年から奈良本さんが教職員組合で三年間委員長となっているが、この時代は、いわば「密室政治」の時代です。石川さんは一九四九年書記次長、一九五〇年書記長となっている。一九五一年にはもう大島亮準氏が書記長となっている。

中川 その時の書記次長は東条永代巳氏です。

松岡 東条氏は五二年執行委員です。執行委員は岩間忠道氏、東条永代巳氏、林義男氏というような方々です。

川本 東条氏は山田専務に高く評価されていたと聞いているが、その頃はまだ山田専務は立命館にきていないのかなあ。

中川 いや、もうきている。

川本 東条氏は、山田専務にかわいがられて会計課長になったように思う。

中川 会計課では、その上に高橋史郎氏がいたでしょう。

川本 身体の大きな人だった。

中川 高橋氏は人付き合いの悪い人だったが、それに比べると東条氏は愛想がいい。

松岡 東条氏は腰が低かったな。

川本 初代の常務になって直ぐ辞めたあの橘清氏はどういう関係で立命館にきたのかな。あの人と長宗我部蓬城氏などは経歴が似ているように思う。

中川 同じ世代ですね。

川本 あの人たちが立命館にくる背景には、やっぱり末川さんや小田美奇穂さんとの関係があるのでないですか。

松岡 長宗我部さんも橘さんも満鉄組です。三高のストライキで、山田幸次さんや北山茂夫さんなどがいるが、このへんの人たちともつながりがあるのだろう。

山下 北山さんは山田さんを尊敬しておられた。三高のストライキの時に北山さんはうまいこと逃げたが、山田さんは頑張った。それで、北山さんは山田さんに頭が上がらなかつたようだ。

松岡 結果的に一番うまくやったのは北山さんかも知れないね。山田さんは最後までずっと苦勞した。北山先生からしみじみとお聞きしたことがある。「山田君はほんとにえらい人なんだよ」と。橘さんとのつながりはよくわからない。

川本 橘さんという人はリベラリストなのか個人主義者なのかよくわからないね。

松岡 彼には一種の「隠れ個人史」があるんだと思う。

井川 あの人を見ていると、なるほど、戦前というのはこういう人物をつくつたのかという気がします。「特高」に相当痛めつけられた時代の人ですね。

松岡 教員で外から入ってきた人があと何人かいます。西村信雄さん、前芝確三さんなどもそうだ。

川本 言わば、革新派の人たちが入っている。長宗我部さんをはじめとして、西村幸雄さんもそうだ。そういう人たちをかき集めてきた中心人物はいったい誰だったのだろう。

中川 やはり、小田美奇穂氏じゃないかなあ。

川本 末川さんばかりが前面に出ているが、陰で、実は小田さんなんかいた。小田なる人物は、今の言葉でいえば、いわゆる「民主的な人間」で、そういう民主的な人たちを集める役割を果たしたんじゃないか。末川さんというのはそういう人たちを一人ひとり呼んでくるようなことはしないと思う。

松岡 その問題が一つのテーマなのです。つまり、満鉄組やなんかの、戦前とのつながりの具体的なところをつかみたいのです。

### 山田実専務について

川本 ところで井川さんはどうして立命館の職員になったのですか。

井川 私、試験採用の第一号なんです。

川本 新聞か何かで職員募集を知ったのですか。

松岡 同級生とかに紹介してもらったのですか。

井川 そうそう。

松岡 金井直彦さん、和田豊さん、崩場弘さんなんかはもう立命館にきていたのですね。

川本 金井さんなんかも、まじめに労働運動をやっていた。首を切られたのかどうか知らないが、実直な彼もそういう労働運動の関係もあって立命に來たのじゃないかと思う。そんな人たちが構成されていた当時の学校側の人びとであったが、若い僕らから見ればだいたいいつも敵だったけどね。崩場さんも社会党か何

かの事務所の事務員だったそうで、〃わしは社会党の市会議員か府会議員に出る言われたけどやめた〃などと  
言っていたよ。

井川 西村幸雄さんは民統グループですかね。

川本 なんかそういう関係が形成されたのかな。

松岡 山田専務もそういう関係に案外近いのかもしれないが、西村幸雄さんは法律文化社の亀井蒞氏の関係で立命館にきた。

中川 その亀井氏は山田実氏のところにいたのでしょうか。

松岡 そうらしいね。

川本 山田専務というのは立命館に何年までいたのかな。

松岡 「緑の学園計画」がつぶれた数年あとの一九六二年一月まで約一〇年です。

川本 当時の立命館はまさに左派の大学だった。世の中全体がそういう傾向であったのだけれど。山田さんは、一年か半年で立命館を辞めたのじゃなく、そういう時期に専務として、一〇年もいたのだから、やっぱりその気がある左だったんだ。われわれは、若い頃山田専務は世にも稀な反動だと思ったがそうじゃなかったのだ。それが面白い話があるのです。第三次長計で三五億円目標の募金活動をやった時に、あの人から僕に分厚い手紙がきた。僕はそれまでに山田さんとは一回か二回しか会ってないが、奈良本さんや日本史関係者をぼろくそに言っていたのを憶えている。なぜかといえは、立命館は日本史の教員ばかりを採用するといつてね。それともうひとつは、当時、一〇〇万円でも五〇〇万円でも金をだすから入学さしてくれという人が

いっばいいるのに、固いこといって入れない。五人や一〇人入れたらいい。これが固いからと言ってと、隣室の末川さんを指差していた。だから僕なんかは若い時、やっぱりこの人は右だと思っていた。ところが、僕が常務理事になって、第三次長計をやった時にその山田さんから手紙がきた。どういう趣旨かというと、川本お前は自重せよ、だいたい立命館が企業から金をもらおうというのはどういう事だ、今までの立命館をなかがしろにするのかというのです。要するに会社から金をもらおうというのは裏切り行為だと、山田専務がそういうのですよ。浅井先生がそういうのならわかるが、山田専務がそう言ってきたので頭にきてね。僕は、第三次長計は学園の方針からいえばこういう事だと説明したら、すまなかったということになった。そのために山田専務の自宅である須磨までごあいさつと報告に行きました。

井川 あ、「緑の学園計画」の中心だった山田専務がね。

松岡 そう、「緑の学園計画」の中心は山田専務で、末川先生は逃げ腰だった。

川本 山田専務まで「産学共同反対」と真剣に思っていたんだよ。

松岡 でも、山田さんは並みの人材じゃないですよ。私は一九五五年からつき合って、時々話をしたことがあるからよくわかります。

川本 末川さんだけじゃない。山田専務は立命館の中でみれば、どちらかといえば右だけどね。広い意味で、労働組合用語でいったら「統一戦線派」というところだったのだと思う。

松岡 山田専務は一九五一年から六二年の一年間立命館にいた。専務が立命館にきたのは、前の専務に汚職めいた問題があつて辞めたのがきっかけだ。そのあたりから、法学部の御三家（浅井清信、西村信雄、

細野武男)らが中心になって、いわば学内の「統一戦線」を始めるわけだ。そして神戸市の現職だった山田さんを引く張ってくる。

**川本** 山田さんは最初神戸市役所の財務部長だった。そうそう、須磨に行った時のことを思い出しました。当時の市長が、山田財務部長に、こういう具合に金を使えと言ったが、それは公私混同だと山田さんは反対した。市長のいうことをきけないのなら辞めろというので辞めた。ところが、次の選挙なんかで市長が交代して、もう一回市役所に復帰する。それで彼は助役かなんかになった。その後立命館に来るんですよ。だから、とにかく気骨のある人で清潔だった。それで立命館の運営はもつのですよ。

**中川** たしかに山田専務は立命館全体のことをよく考えていて、非常に確固たる信念をもっていた。

**山下** その通りだ。立命館の七〇周年か八〇周年かの時に、来賓で山田専務が来ておられた。その時は控え室で山田さんの相手をしていて、「緑の学園計画」のことを話していた。あの当時のことは、まあいろいろと言われるけれど、「緑の学園計画」はやっぱあの時やっておけば立命館のためにはなったなあと思われていた。本人は一所懸命だったのです。

**川本** 須磨に行った時に、もうひとつわからないことがあったから聞いたのです。「緑の学園」についてももうちょっと聞いておけばよかったが、なぜ衣笠に統一しなかったのか、ぼくらが聞いているところでは、山田専務が反対したということですがと聞いた。そしたら、川本さん、反対したのは末川さんだよ、ということです。末川さんは、衣笠には中川小十郎の墓があるからそれが嫌だった。末川さんが学長になるとき、小十郎の息子の中川幹太にするか、末川にするかという問題があった。教職員の方は幹太で、卒業生の方が末

川を推挙していたのです。立命館の教職員が全部あげて末川を歓迎したわけじゃない。そういう戦前の残滓のようなものが残っていたのです。

**井川** 山田さんは、神戸の弁護士の兼光さんとか小田さんなどと関係があり、そういう関係でおそらく立命館にきたのだろう。

**松岡** 末川さんや細野さんも関係があつたのかもしれないがね。組合とは全然関係ないし、奈良本さんとも関係はないだろう。

**中川** 組合との団体交渉が妥結か決裂かの頂点に達した時、山田さんは、組合はけしからんと怒っている一面はあつたが、そんなとき何回か組合専従の僕を呼んで話をされた。下つ端の僕らまで呼んで話をするとするのは、組合を大切に、真剣に立命館のことを考えていたからだと思う。

**松岡** それは、山田さんは財政の責任者だから、末川さんよりもっと一所懸命考えていたといえる。私は一九五五年に書記局長、五六年には青年婦人部長だったので、組合書記局にしょっちゅういた。団交で天野和夫さんがつぶれた時、休憩時に、あの中川会館二階の役員室で執行委員会をやっているところへ山田さんが心配してやってきた。

書記局には奈良本先生がよくやってきて、自慢話ばかりしていたという記憶がありますね。奈良本さんといふのは、よほど自分のことを偉いと思っていたのですね。雑誌『世界』なんかにたくさん論文を出す、書くことが大事であるとか、原稿料はいくらだとかそんな話ばかりだった。僕のような入ったばかりの、極めて純朴でまじめに民主主義者を目指している者をつかまえてね(笑)。この人はあかんと思つたね。当時

の組合からみれば山田さんは右翼的なというか、そういう感じはあったが、誰も心ない人だとは思っていなかった。山田専務がいれば組合を育てたひとつのバックであり、正しくは「末川・山田体制」なんですよ。

**川本** 僕が組合に入った頃は、どういふのかな、「労使は共に天を戴かず」という雰囲気だった。要するに、理事会は「階級敵」みたいなものだと思っていた。誰の思想を受けてそうなったのかわからないが、理事会は敵で、山田専務はその中心だという印象があった。もうひとつ印象として悪かった要因は、僕らは西村幸雄さんを尊敬していたが、その西村さんと山田専務が、僕らの印象では水と油みたいな感じだったことだ。実際はそうじゃなかったのかも知れないが、そのへんの実情はよくわからない。片方で柳田という人事課長がいて、これが保守反動で、偉そうで、山田専務に一番近い人と思われていた。だから、遠くでは比較的民主主義的な西村さんと山田専務、近くの職員では人事課長の柳田氏とわれわれは対立しているのだと考えていた。長宗我部さんなんかは、その間にいて、その下に和田さんと栗山さんがいたという印象だった。井川さんは西村さんのところへ今田博之、中橋貞造氏などともに足を運んでいた。私は衣笠の理工にいたからそんなふうに写っていた。山田専務というのは、ベースアップに厳しかった。

**松岡** 世に大辰・小辰ともいわれた時代で、みんなそれにゴマをすらざるをえなかった。

**川本** 奈良本さんというのは、若い頃はけっこう力をもっていた。林屋さんは自分がボスになろうというような意識はなかったし、姑息なことはしなかった。奈良本さんの方がいろいろ陰で動いていた。

**井川** 部落問題の時に、奈良本さんと林屋さんから話を伺った。これは人物が違うなと思ったね。

**川本** 奈良本さんは朝田善之助氏に急所を握られていたからどうしようもない。それで糾弾されて、脅か

されたわけだ。林屋さんは最後まで自分の説を通して頑張った。

**松岡** 林屋さんのほうが部落問題の専門家ですからね。部落問題研究所には、解放同盟の分裂前から末川さんもかかわっていたが、むしろ中心は奈良本さんだった。

**川本** 末川さんは結局、最後まで部落問題の本質が分らなかつたね。天野さんもそうだ。岡崎長一郎さんなんかは間違い放しだった。まあ歴代総長の中で部落問題を一番よくわかって、問題の本質を基本的に押さえていたのは細野さんでしょう。

**伊藤** 昨日、理事長が降旗（旧姓平林）さんの話をされていて、一度ヒアリングを計画すればと言っておりましたが、降旗さんはどういう方ですか。

**川本** 降旗さんは昭和三三年三月に立命館の職員を辞めた。井川さんが学生部に入ったのがその年の暮れで、降旗さんが辞めたほうが早いのでしょうか。

**井川** いや、僕が学生部にいったときに降旗さんが辞めたのだから、入れ替わりだった。

**川本** 僕が入った昭和三三年四月には、中川さんも組合専従を辞めているし、降旗氏は東京に行つて、すでにいなくなつたから、どちらも知らなかつた。

**松岡** 降旗さんは一九五四年の細野委員長の際に執行委員として出ているが、一九五八年三月まで在職していたのですね。

## 末川博総長について

中川 中川小十郎と末川さんの関係ですが、小十郎は末川さんに大正七年以来講師になってもらい、民法の講義をお願いして末川さんを大事にしていたようです。大学の学術雑誌『法と経済』の創刊にも末川さんに尽力してもらっていたのです。太平洋戦争後半期学徒動員ということで軍隊に、軍需工場に出してしまつて大学には殆ど学生がいなくなつた昭和一八年頃から一時期末川さんは立命館と縁が切れたようです。

同じ頃、「今の世の中で民事訴訟法なんかやる必要がない」と乱暴なことをいって吉川大二郎さんの開講科目を削つてしまつた。吉川さんは大学へ行つたところが俺の講義がなくなつていた、と。

ちなみに、大正デモクラシーのもとで制定され、施行されてきた陪審法の施行停止法ができ、それ以来陪審裁判が行われなくなつたのは昭和一八年ということだった。

松岡 吉川さんも板木郁郎さんも同じようなことだった。民事訴訟法は要らないというのは辞めさせる口実だった。

川本 それがあつたから、末川さんは板木さんを大事にしたのだな。

松岡 そうかも知れないが、板木さんは硬骨漢だったからね。

川本 末川さんは偉かつたから、私大連盟なんかには出なかつた。学生だつたから、そんなことはよくわからなかつたけど、法政の大内兵衛と立命の末川博は私大連盟に出席されなかつた。その代わりに全部行つたのが板木さんで、要するに私立大学連盟の記録に出てくる立命館の人の名前は板木郁郎である。

松岡 板木さんは、いわば渉外部長だった。

川本 その時分に、同志社の上野さんが連盟の中心になっていたのではないかと思う。

僕に言わせると、それぞれの考え方は違うが、その系統を引き継いで、細野さんも、武藤さんもそういう傾向があった。細野さんなんかも、連盟は、お付き合いであったと思う。本格的にやり出したのは、天野さんからだ。でも、僕らもだいたい細野さんと同じ考えだった。連盟で何の勉強になるのだ、わが立命館は平和と民主主義だから逆に連盟は我々を見習えと思っていたくらいだ。いま考えると、まったく立命館の独りよがりだった。西村さんは連盟での活動を一所懸命やられた方ですが。

#### 西村幸雄常務理事について

伊藤 西村幸雄さんはどなたの推薦で立命館にこられたのですか。

川本 さつきも話しがあつたように、法律文化社の亀井蒨氏で、西村さんは細野さんや沼田稲次郎さんらと一緒にやっていたのですね。

松岡 亀井さんは西村さんとは親友です。沼田さんともね。

伊藤 西村さんと沼田先生は、「夕刊京都」で一緒だったのですね。

松岡 だから、沼田さんに会ったら、よく西村さんのことを聞かれた。

川本 西村さんが立命館にくる前から、西村信雄先生、浅井清信先生や末川先生も、彼を知っていたのじゃ

ないか。

**松岡** 西村幸雄さんは何年に立命館にきたのだろう。僕が入った時にはもう法学部事務長だったが。

**井川** 昭和二四年かな。

**松岡** 西村さんはレッド・パージにあったのだから二四年だろう。

**山下** パージが大学の方におよんできたのが二五年だから。

**中川** 昭和二四・五年頃、法学部は沼田稲次郎さんを教授に迎えることを決めたのだけれど、彼はその前に東京学芸大学に行ってしまった、一年有余で東京都立大学の教授に就任した。新聞界のレッドパージの吹き荒れる前夜の京都と東京を行き帰りの仕事であったが結局夕刊京都を退社、東京に居をかまえた。沼田稲次郎さんはもう京都には帰ってこないということで、教授就任は実現しなかった。

**伊藤** 当時、「西村学級」といわれるものがあって、今田、秀平、井川、中橋さんなんかその生徒だったのですか。

**井川** 私なんかは外様ですよ。

#### 他大学の教職員組合

**井川** 国立大学の場合は事務長室があつて、コンコンとドアをノックして入ったら、事務長が奥に一人である。立命館の末川さんだったら、総長室をのぞいたらもうそこにいる。そういう違いが国立と私立である

立命館の間には歴然としてあった。そんな雰囲気だから、国公立ではなかなか教職員組合を作ることにはならなかったように思う。

**松岡** 普通は職員中心にしか組合はできない。だいたい、教授になったらほとんど組合員にならない。京大なんかでも、経済学部などは特別だが、工学部などでは、例外的にあのノーベル賞を受賞した福井謙一先生が最後まで組合員だったので有名だ。法学部でも教授になったら、もうほとんど組合はお付き合い程度で、実質は全員非組合員だった。

**井川** 教員は労働者じゃないみたいになっていた。

**伊藤** ここに法政大学の百年史の抜粋がありますが、大内兵衛先生なんかは大学教授には教授会があるのですが、ここで教育・研究条件や給与問題に関しても、理事会に対しても十分に交渉できるから、組合をつくる必要はないと公然と言っておられる。

**川本** 朝田善之助の部落解放同盟みたいですね。部落解放同盟があれば、母親大会も労働組合も平和の会も一切必要ないという考え方だ。解放同盟で全部やれるというのは、いわば教授会至上主義と一緒だ。

**松岡** 法政大学にしてはわかりだからね。組合の初期の頃のことを日教組もまとめていますが、明治、法政、立命、同志社、要するに四大学そろって、全部、教員・職員合同の組合です。その頃中央大学は教員だけで、職員の組合というのは理事会の手先みたいなものだった。法政もそれに似たようなことになった時期がある。体育会出身の職員が中心でね。安保以降に結成された慶応も早稲田も教・職別組織でしかできなかった。

## 一九五〇年代の業務協議会のことなど

山下 一九五〇年代から一九六〇年代を通じて回想すると、特徴的なことの一つに、昼休みに清心館の会議室で、誰かの話があるといつて、しょっちゅう集まって学習をしていたということがある。学部長の大西芳雄先生はいやな顔をしていたけれど、昼休みに飯食いながら安保の話などをやっていた。

川本 そうそう、広小路の清心館でよく勉強会をやったね。西村幸雄さんなんかは結構うるさかった。君、発言するならもっと勉強してから来いとか言われてね。

松岡 それは人を見て言っていたので、あれで結構気をつかっていたのだよ。

西川 「平和の会」などでもよく学習会をやりましたね。前芝確三先生の話などもよく聞いた。

川本 井上晴丸さんとかの話もね。

松岡 それと、経済学教科書の読書会をやったのを今も覚えている。あれは何年頃だったかな。一九五五〜六年かな、武藤先生がきておられたね。

川本 昔は面白かった。業務協議会で、理事会側の武藤さんが賃金回答をするのに、「人民内部の矛盾」とかいつて。そうしたら、組合側の岩井忠熊さんが毛沢東の「矛盾論」とか「実践論」についてあなたは判っていないなどと反論して、それで組合側が勝つのです。

山下 理事会側の小椋広勝先生が、「今年の世界労連の方針を組合はどう考えているか」などといつてね。  
川本 山元一郎さんというのはおもしろい先生でね。学生部にきて、細野さんと毛沢東の「実践論」の話を

しておられた。山元さんは、あの「矛盾論・実践論」というのはおかしい、あれは問題があると細野さんに真剣になっていっている。細野さんは、ああいう人だから、「そうかねえ」、というような受け応えで、その辺が、うまいというかずるいというかね。おそらく腹の中では、お前はえせ学者だと思っけていても、かっとなつて、君、何言っているのだとはいわない。「ほうかねえ」、と感心したような顔で聞いている。細野さんという人は、だから友達の範囲が広いのだね。

**松岡** だからといって、細野さんも毛沢東をそんなに信用しているわけではなかった。

**川本** 山元さんというのは、彼は彼なりに「実践論」を読んでいて真剣だったのでしょね。

**松岡** 確かに山元さんというのは面白い人だった。この歴代組合役員名簿には名前が出てこない人でも、そういう裏で運動を支える人たちが多くおられた。

**川本** 三田村泰助さんなども、ソビエトや中国など、長い目で見れば、あれはどこまでもつかわからんといっておられたね。

### メーデーや、サークル活動のことなど

**川本** 一九五九年当時の理工学部の組合はいい加減なもので、メーデーなんて誰も行っていない。理工学部の組合員でメーデーに出たのは僕が初めてだと思う。メーデーといえばみんな行かないものだと思っけていた。メーデーというのはむしろも行っけていいのか、仕事はどうなるのだという、出たい者は出ればいいと

いので、徳田耕作君などを誘って、メーデーへ行ったらおもしろいと言って、新人の就職した連中だけが行った。それが、理工学部からメーデーに出た最初だった。

**伊藤** メーデーといえば思い出しますが、僕が入った六八年、最初のメーデーの日に末川先生や西村幸雄さんなんか、広小路の門の前で手をたたいて僕ら組合のメーデー行進を見送って下さったのですよ。「ほんまにええ大学やなあ、こんな民主的な大学はない」と、すごく感激しましたね。

**山下** 来年から川本理事長が送りますよ（笑い）。

**伊藤** それからね、メーデーで思い出すのは、五月一日のメーデーについての休講の取り扱い方です。それまでは「都合により」休講だったのです。それが、はつきりと「メーデーにより」休講と決まったのです。「都合により」にするか「メーデーにより」にするかの大論争の末、「メーデーにより」が勝った。当時の立命館の状況が端的にわかる事例だと思います。その後、学年暦が変わって、休講も何もなくなりましたけれど。ともかくも僕は、立命館に就職した時のメーデーで末川先生が、門のところ立って笑顔で送ってくださった感激を今も鮮明に覚えています。

**松岡** 末川先生は以前先頭に立ってメーデー行進に参加されたこともあるのだから。

**伊藤** 話は戻りますが、戦後の民主化の中で、教職員組合の果たした役割というのは、ものすごく大きかったと思います。たとえば、僕は理工学部でしたけど、組合が要求しないと、傘立てやロッカーは設置されなかったと先輩から聞きました。

**山岸** それは学生のものか。

伊藤 いや教職員のです。

山下 サークルなんかができてきたのは、青年婦人部が中心になっていたのかな。

伊藤 僕らの入った頃、「輪読会」というのがあって、それに参加しました。

松岡 「輪読会」なるものはいつからあるのかな。

川本 僕が入って二年目くらいかな。細野さん、貞広さんに相談にのっていただいた。それで梅田四郎、林徹郎、徳田耕作、高津哲哉などと、理工学部を中心にして出来たわけだ。

西川 広小路の方には「社研」がありましたね。

川本 「輪読会」では、ソビエトの原子爆弾は正しくて、アメリカ帝国主義のそれは悪いという意見と、ソビエトであろうとアメリカであろうと原子爆弾はこの国のものでも一緒じゃないか、という意見の根底的な対立があり、侃侃諤諤の議論を延々とやりましたね。

それに、原水禁のカンパ活動のことを思い出します。原水禁のカンパ活動をすると、教員にはカンパしな  
い人がいる。それで、月給日には給料を取りにくるから、その横に机を置いて、「はい先生、原水禁のカンパ  
です」といつてカンパをしてもらう。カンパをしない先生を追いかけて行って、「先生、あんたは何の為に研  
究をしているのだ、平和に賛成出来ないというのはどういうことだ」といつて追及する。みんなしかたがな  
いから、給料から出して、一〇〇パーセントのカンパになる。それが教授会で、あれはやり過ぎだといつて  
問題になった。江夏弘先生が組合の支部長で、川本君、教授会で問題になっていると言ふ。僕は、「あんたそ  
れでも組合の支部長か、教授会で組合運動を問題にするというのはどういうことだ、職場集会を開け。それ

が筋じゃないか、どっちを向いているのだ」と、今度は支部長の姿勢を問題にしてね。それから江夏さんは僕にあんまりいい顔をしない（笑い）。

**松岡** これが一九五九年で、その後、給与体系問題が中心となるのですね。

**川本** 給与体系問題では、江夏さんが副委員長でしたが、大会で理工学部は反対した。私は理工学部全体が反対というのは困る、私は理工学部だが賛成だといった。

**松岡** たしかにあなたも理工学部だ。

**川本** 理工学部全体というのはおかしいじゃないかといってね。

**松岡** その結果、えらいことになって、執行委員会のなかで江夏さんが副委員長を辞めるといいたした。「湯川秀樹先生から進退を常に明らかにするようにご指導を受けている」といってね。

**山岸** 結局、辞めなかったのと違いますか。

**松岡** 辞めなかったのかな。

**川本** 考えてみたら、江夏先生と対立するようではあかんのです。

**松岡** いい先生だった。

**川本** 江夏弘先生というのは理工学部のプリンスだった。全国的に通用し、将来を嘱望されていた。だから、組合の副委員長になっても、理工学部の支部長になっても、誰も文句を言わなかった。それは、別に先生が組合運動ができるからじゃなくて、要するにプリンス的にシンボライズされていたのだと思う。

**松岡** あまり時間ありませんが、五五、六年頃の話で言っておきたいことはもうありませんか。

川本 理工学部にいた時、たまに広小路にいつて組合の話聞くのだけれど、難しくてわからなかった。こいつらは何をやっているのか、たしかに学園のことを話しているのだが、難しい抽象的なことばかり言うて要するに明日からどうしていいかわからんわけ。大学教授というのはそういうところがある。僕なんかは単純だから、明日から何するのか、はっきりさしてくれっていうようなものだった。

伊藤 組合だけではなく、大学の行政文書でもだいたい立命館の場合、前口上が長くって難解な文章が多い。僕のように頭が悪く気が短い者は、最後までなかなか読み通すことができない。世界の情勢からはじまって、資本主義国家の批判、「貧困で反動的な文教政策」の批判、と延々と続く。

松岡 具体的なことがわからないからそうなる。情勢についてはなんとでも言える。同時に理事長が難しうと言っている頃は、「緑の学園計画」をつぶして、まさに迷いの時期の話だからね。

川本 せっかちになるなといわれてね。

松岡 政策問題、体制問題というのを、本格的にやらなきゃならないが、揺れ動くわけだから。その頃、運動的には、原水禁運動がはじまっているが。

川本 一番最初につくった調査委員会というのは相当よかったのではないか。

松岡 あれが政策化のはじまりで、一九五七年のあの臨時調査委員会が学園の大きな転機です。

川本 立命館の長期計画の草分けですね。

松岡 そうですよ。手探りであっても全国の私学のなかで大きく輝くものだ。「一二月原則」などに結実する。

川本　　そういう大きな流れがあつて、その延長線上に経営学部・産業社会学部をつくりあげる。そういう経験を踏まえて、第三次長期計画を立てるのだが、その間に「部落問題」や「大学紛争」がある。

松岡　「臨時調査委員会」からはじまって、あと「企画委員会」になる。

川本　最初の調査委員会の主要メンバーは誰だろう。

松岡　西村幸雄さん、細野さんなどでしょう。

組合は青年婦人部が活発になっていた。サークルは最初、「社研」からはじまった。

川本　僕らは知らないけど、西村幸雄さんは「社研」などにも相当かかわっていたのだろう。

松岡　私が入った時はもう「社研」はあつたよ。

西川　その頃学外の「京都勤労者学園」や、その前の「京都市人文学園」に、たくさん行っていましたね。そのメンバーがほしい「社研」の中心でしたね。

松岡　「社研」はいつからあるんだろうね。

川本　男性はあんまり行っていないように思うが。

西川　そうでもないです。戸倉さんなんかも行っていたと思います。僕は行ってないけど。

川本　私の印象では、あの学校へ行って、成長したのは、若井ます江君ぐらいやね。

西川　若井さんはだいぶん後ですよ。

川本　高卒の者が行って、社会科学を学ぶわけだ。

松岡　若井さんの頃になると「労働学校」じゃないか。

川本 戸木田さんに教えてもらったといっていた。

### 全構成員自治と民主主義

川本 僕は専務とか理事長になって、つくづく思うことがある。松岡書記長・戸木田委員長・川本副委員長・芦田書記長とか、組合でわーわー言って、夜中の一時、二時、三時まで、理事会を相手に交渉をやっていた。しかし、あの頃の理事会は偉かったが、その観点で書いたものがない。総長、理事をはじめ、あの全学協にしてもそうだ。僕に、今あれをやれといったら、頭にきて、絶対に勝負をしている。あれはその時代がさせたことに違いないけれど、しかしそれにしても、武藤さんにしても、浅井さんにしてもあの年で組合や学生と最後までつきあって、偉いと思う。僕は、その観点からのものを書いておかないといけないと思う。あの年でね、松岡とか川本とかは当時チンピラで、若いものだ。松岡さんなんかは昼寝て夜出てくるのだから(笑い)。

執行委員会ほだいたい一一時半頃までかかる。永原書記長は最初に執行委員会は一〇時半に終了しますと宣言する。それは六時頃から始めるのですから当然です。ところが、今日はもうこれで終わると思ったら、松岡さんがウーンと言い出して、それから二時間以上かかる。それから後に明日のピラを作れということになる。山岸君はそれで給料をもらってるのだからいいけれど、私は組合から給料をもらっていないからね(笑い)。

ともあれ、今から思うと、当時の理事会メンバーは偉いと思う。よくまあ、あれだけ粘り強く学生や組合と付きあってきたものだと思う。全学協だって、朝の市電が通って、授業が始まるまでやるのだから。

僕はそのように、学生の意見や組合の意見を聞きながら学校運営を進めていこうという立命館の伝統的な基本姿勢があったのだと思う。学生運動も学生参加も大事だけれど、やっぱり学生は学生で半分子供だ。そこで、学生のいいところを汲み取ってやる力が大人になれば、学生参加の意味はない。学生参加といえは、全共闘でも学生参加の形態だ。それを正すのは大人の力量なんだよ。その大人の力量は必ずしも全部労働組合の力量ではなく、末川総長を中心にした学部長や、立命館の激動を乗り越えてきた伝統的な指導部の力量であり、そのところを紹介しておかないといけないと思う。

**松岡** まさに全構成員自治の力の問題だね。

**川本** 理事会も組合も立命館はみんなお人よしだ。立命館はなぜわかりやすいかというと、他の大学よりお人よしが多いからじゃないか。といっても、あまり科学的じゃないので、説得力ないけれど。学生のために一所懸命で、武藤さんや細野さんも大人だが、お人よしだ。

**松岡** 武藤さんは戦前からのひとだが、末川先生よりはるかにはお人好しだ。

**伊藤** お人よしというか、立命館を愛する心というか。僕は、西村幸雄さんに、いつも遅くまでご苦労さんですね、といったら、「学園のためにやっているのだから、なんでもないよ」とおっしゃっていた。

**川本** 僕に言わせれば、早稲田の総長も、明治の学長も学園を愛する気持ちは同じだが、立命館では戦後デモクラシーというか民主主義を大事にしているという点が違うのだと思う。そういう意味から立命館を一

番愛しているということができる。

伊藤 昨年七月の百年史公開研究会で山下先生が言っておられた、「民主的学園を創造するわが学園の普遍的課題としてのロゴス、立命を愛する熱情のエトス、人類的課題としてのパトス」いうあれですね。

松岡 だから、要するに、立命館さえ良ければいいと思っっているのではない。

### 教職協同（働）の取り組みについて

川本 『立命館百年史』第二巻のどこで書くのが適当かわからないが、立命館の特徴である「教職協同（働）」の姿を書く必要がある。

山下 僕はどこかで、そのことを書いたけど。

川本 これは、他大学とは違う要素だ。その中の一つの役割は組合で、組合というのは悪いことも、いいこともある。どういう所がいいかと言うと、どんな偉い先生でも対等平等の関係であることだと思う。そのために職員が生意気になったりすることもあるけれど。いい点は、立命館の職員が教員と対等に話し、仲良くして協力して行けるところだ。今、長計とか調査委員会というようなものが出て、教員と職員が一緒にやり、職員がまともを書いたりしている。こういう伝統のひとつは労働組合の教職協同（働）のおかげだ。職員組合と教員組合が別々でなかったことのいい点です。

山下 僕はそれを、立命館の一つの特徴として『立命館百年史紀要』に少し書きました。そのはじまりは

やはり一九五〇年代で、あの時代の青年婦人部活動ですよ。若手の教員と職員がハイキングなどに一緒に行つて、文化活動やいろんな事をやって、教職員が一緒に取り組んだ。そういうことが、今、だんだんなくなつてきている。年寄りの繰言みたいになるけれど、あの時代はよかつた。

**松岡** よその大学では、明治、法政も多少それができるが、これは立命館独特の姿だ。

**川本** 西村さん、井川さん、僕とやってきたが、伝統的な総合私立大学で、職員が総務、財務の責任者なつたり、専務になつたり、理事長になつたりというのはまずない。そのことはいい悪いは別にして、それくらい職員と教員の差別がない。全く差別はないと言えば嘘になるが、他大学と比較したら、うちのほうがはるかに自主的・民主的であるという一つの証はそれだと思う。

**松岡** 全学協議会とかいろいろいうけれど、自主的な責任をもつというそれなんですよ。

**川本** 関大や同志社では考えられないことでしょう。それがこの頃、関学、関大、早稲田、慶応なども常務や理事に職員を登用し始めた。それは立命をみならつていのですよ。そこに立命館の民主主義的ありよりの、一つの表現が含まれているように思います。

**松岡** かなり重要な問題だな。

**川本** 大南正瑛前総長なんかはそれで、他大学の人から冷やかされるのですよ。何かあると立命館は職員を大事にする学校だねといつてね。

**松岡** 間違えば職員管理大学論、官僚制支配がでてくるわけだ。

**川本** 伊藤君とか西川君はどう感じているか知らないが、教員が威張つて職員を馬鹿にしていると、そ

ういうことは立命館にはない。

**伊藤** 僕が法学部一回生の時に、山下先生がプロゼミの担当でした。最初の講義で先生が自己紹介されたのです。今でも憶えていますけれども、僕は和歌山県出身で、ラジオの修理とか作ったりするのが趣味だという話をされた。山下先生だけではなく、立命の先生は、学生の目線や関心にそった授業をされており大学教員を非常に身近に感じた。立命館は教職員と学生が大学を創っていくという「WIITH形式」の教育、組織運営が伝統として生きていますね。決して一方的な「TO形式」ではないんですね。

**山岸** そういう土壌がどうしてつくられたのかという事ですね。多分うちの教員が、よその教員のようなスタイルだったら、絶対出来ない。しかし職員のところにも一定の力量を持った人がいたということでしょう。

**川本** 僕が思うには、教職員組合とか平和委員会といっても、教員全員が大衆運動に出てくるというようなことではない。今でも法学部から委員長や書記長がでたときは法学部の教員は比較的多く動員に出てくるが、経済からでたら法学部はあまりでてこない。その点、職員は単純なもので、誰が委員長になっても、出る。職員というのは組織的だ。大衆が動かないと大衆運動にならないから、教員の指導部は松岡書記長であろうと、山下委員長であろうと、職員を常に視野におかざるをえない。そういう中で、教員は教育もしなければならぬし、職員はそういうことを認めながら、教員の全部ではないけれど、民主主義的な活動をする先生方と仲良くなっていく。

**山下** 教職員の協同(働)は、僕自身の経験から言って、青年婦人部だとか組合の正規の機関以外での経験が非常に大きい。今思うのは、一九五〇年代、一九六〇年代の前半期くらいまでの、あの時期はまだ組織

の規模が小さかったが、今の条件のもとで、同じことをやれと言っても無理だ。ハイキングで交流しろと言っても、そうはなかなかいかないと思う。今の条件のもとで、同じ目的を追求するには、何をやったらいいのだろうか。僕は『百年史紀要』の原稿を書きながらそう思ったけれど、そこは考えてくれと行って逃げている。一九五〇年から六〇年代の前半くらいまでの頃は、たいていの教員は執行委員や職場委員を経験していた。塩田親文さんも、山手治之さんも青年部長をやっている。教授会メンバーが、あの頃は二く三〇人足らずだった。あの広小路研心館の法学部長室の狭いところに閉じこもって教授会をやっていたわけだ。業協や団交をやっているときには、その席に行くわけにいかないから、みんなあの部長室で待ち構えていて、どのような交渉になっているのかと行ってワイワイやっていた。

川本　しかしそれは、法学部だからできた。文学部ではそうはいかなかった。

山下　そうだったかもしれないね。

松岡　当時の法学部教授会は三〇人も居ない、せいぜい二〇人程度だった。

### 現在の教職員組合活動のあり方をめぐって

川本　今、山下先生がおっしゃったように、そういう問題を現在のどうするかという問題がある。国際問題も経済問題も日に日にややこしくなってきたが、僕が今、もし青年部長だったら何をするかといえば、例えばなぜ財閥が合併するのかというような問題をやると面白いと思う。そういうテーマを次々に掲げ

て、専門の教員に話してもらえばいい。昼休みでもいいからそういう学習会をやるわけ。オリンピックの問題でも何でもいいから、いろいろ取り上げる。一七歳問題でもよい。深草の校長をしていた加藤直樹先生に一七歳問題の見解なんかを聞けばよい。組合員の教員に報告してもらい、職員も教員もみんな教育に関係あるものが集まってやるというように、やりようはいっぱいあると思う。ただ、昔のように傘立てを要求しようというようなことは、今で言えばアホみたいなもので、物的要求の問題はそういう様相を示している。しかし、知的・学術的な問題では、昔より今のほうが、教限りなく全面的、多面的に広がっている。世紀末と言ってもいいぐらいの大きな問題があるが、その問題認識が乏しいと僕は思う。また、大文字山とか比叡山とかいわず、海外旅行を組めばいいんですよ。みんな勝手に外国へ行って、遊んでいるが、組合なら、外国へ行って勉強ができる。参加費を安くして、補助金も出して、イギリスでもアメリカでも東南アジアでも、見るところはいっぱいあるので、いって勉強すればよい。ただ、残念なことに、そういう事に労を惜しまずやろうという人が少ない。ベースアップだけにしがみついて、最後は我慢で泣かなくても、やるべきことをやっていたら、そんなことは大したことじゃないわけだ。

**松岡** 教員の世界も、日常、職員と仲良くするとか、心を通わす機会がなくなっている。法学部でも六〇人いるのだから、学部の教員の中でも互に孤立しやすい。助講会や若手懇もあつたが、それも形式化しかねないし、ソフトボールのチームも組めない状況にある。

**川本** やっぱり世の中のいろんなことを学ばないといけないと思う。例えばロータリー・ロータリアンとかいって、あれで結構人の心をくすぐる。特に中小企業の社長なんかは、ロータリーの会員であることが名

誉なのです。僕は、何度か行ったけど、それはまあ真面目なものだ。あれは賢いやりかたで、仲良く昼飯を食いながら講演でちよつと話を聞く。そのテーマもアップトウデートなものをいろいろやって関心を持たせるわけだ。ライオンズクラブやロータリークラブのように金をかけてやらなくとも、組合は組合サイドからそういう観点でやったらいいのですよ。ゴルフでも、好きな会員をたくさんつくってやればよいので、松岡や川本を相手にゴルフをしようと思うから誰も来ないのだ。今、ゴルフといえば、理工学部の教員でもやっている人は多いですよ。そういう新しいところを、新しいことで組織すればいい。僕らの若い頃は、ゴルフなんてブルジョワの遊びだと思っていた。けれども、そういうものを組織して、一回ゴルフに行こうというときに、ゴルフのあい間に三〇分でも四〇分でもいいから面白い話をするとか、工夫したらいいのですよ。組織の仕方というのは、知恵を出したらいい。近頃は男でも、食べ物に詳しいのがいっぱいいて、あそこの蕎麦がうまいとかいっているし、女性はもちろん食べ歩いている。食べ歩き会でもいいから、そんな会をつくれればよい。現実的な要求でやろうと思えばいっぱい出来る。音楽でも、私の女房がピアノをやっているなどという人も結構多い。僕なんかは、ややこしい音楽を聞くのはいやだし、行きたくもないけれど、音楽会の招待券などを送ってくる。世の中はそういう具合になっているのだからしょうがない。この間も、京都会馆でパリ祭とかいうのがあって、券を送ってきたからしかたなしに女房と二人で行ってきた。男はたったの三・四〇人で、女ばかりが会場いっぱいだ。これは失敗した、もう二度と行かないと思ったけどね（笑い）。もうちよつと、立命館の教職員もそういうことやれば出来ると思う。

山下 よもやま話になるけど、僕はだいたい弁当を持ってくる。法学部時代には昼休みに共同研究室へ

行くと、教員も数人集まり、職員ともよく話しをした。同じように政策科学部へ行ってからも、最初は弁当を持って共同研究室にいつていた。しかし、弁当を持ってくるのは僕一人しかいないので、懇親会の時に、誰かせめて二、三人位は弁当を持って、共同研究室へ出てきて喋ろうではないかと呼びかけたが全然出てこない。あそこにはコーヒーを飲む所があるのだが、コーヒーを入れても、そこでは飲まずに自分の部屋へ持って帰って飲むわけ。いつまでも一人で、共研へ弁当を持っていつて食べていてもしかたがないので、このごろは自分の部屋で食べているが、ちよつとさみしいね。

**伊藤** 弁当持って来て個研で一人寂しく食べておられるのですか。

**山下** コーヒーぐらいは共研の部屋で飲めたいと思うけど。

**松岡** だから学校としてもっと工夫がある。例えば末川記念会館の生協レストラン「カルム」でも、三時くらいで人がいなくなり、夕方には誰も来なくなって早仕舞いになってしまった。改装して一番いい場所にあるのだから、新しい方針を出さないといかんと言っているのだが。組合もあんなところにひっこんでいては駄目で、末川記念会館は百年史編纂室より組合が移ったほうがよいと私は思っていたのだが。とにかくなにか昼休みにでも、みんなが寄るような仕掛けが必要ですね。

話しはまだまだ続きますが所定の時間を大幅に超過しておりますので、この辺で座談会を閉めることとします。本日は皆さん大変有難うございました。

なお、この座談会は「教職員組合運動、学生運動の高揚——一九四七年～一九五五年頃を中心にして——というテーマで行ったが、内容を考慮して百年史編纂室の責任で標題の通り変更した。